

随想

# 都市景観の インタープリター

松村 嘉久

学問分野が異なると、学術用語に対するスタンスも異なることは、そう珍しいことではない。「景観 (landscape)」は幅広い分野で使用され、地理学でも重要な概念のひとつである。都市計画や景観工学といった分野で、景観という用語と親和性が高い動詞は、「創造する」や「修正する」であろう。景観行政と関わっては、「保全する」とともに「整備する」や「形成する」もよく用いられる。一方、地理学ではどうであろうか。ここまで紹介した動詞も使うけれども、その能動的なニュアンスに何か違和感を覚える。地理学で景観に最もなじむ動詞は何か、異論もあるだろうが、地図と同様、「読む」あるいは「読み解く」と答える人が多いのではなかろうか。

服装や髪形や言葉などの流行は、ひと昔もすれば記憶が薄れゆき、周辺へ伝播したとしても、遅かれ早かれ記憶から消えてゆく。ところが、河川の浸食や火山の噴火などの自然の営み、衣食住の確保や快適な生活維持のための人間の営み、これらが地表面に働きかけて刻み込んだ痕跡は、よほどのことがない限り消えない。たとえ新たな痕跡が刻み込まれ変化したとしても、たいていの場合は、かつて刻み込まれた痕跡の影響を強く受け、新たな痕跡のなかに過去の痕跡を見出せる。

我々が現代で観ている景観は、その時々自然と人間の営みの痕跡が、地層のように積み重なり形成されてきたものに他ならない。江戸時代の地層の一部が地表に露出している場合もあれば、昭和初期の地層がほぼそのまま残存している場合もある。異なる時代に異なる文法で刻み込まれた異なる痕跡が、同じ地表の構成要素として混在一体化して、現代の景観を形作っている。地理学が得意とするのは、そのような景観を丹念に読み解き、地域の特色を総体として描き出すことにある。

大阪において、国際観光学という学際的領域で教育研究活動を始めて、はや6年が過ぎた。大阪の観光の現場へ出てゆくなかで、その行く末を真摯に考え仕掛ける人たちが、その現場を支える人たちとの交流も深まった。最近では、国際観光学の立場、あるいは観光地理学の立場から、大阪の観光振興に向けた方法論や具体策の提言を求められることも少なくない。

さて、大阪観光を振興するためには、いったい何が必要なのか。神戸や京都と比較して、「大阪は汚くて歴史がない」と投げ捨てる人もいる。百歩譲って、神戸よりも「汚く」、京都よりも「歴史がない」としても、大阪はエキサイティングでエキゾチックな魅力にあふれている。

日本人の観光の在り方の質的変革を促すためにも、広く都市観光の理論的基盤を模索し振興するためにも、現代の大阪が最も必要としているのは、都市景観を読み解

く優れたインタープリター (interpreter) であろう。インタープリターとは、エコツーリズムの現場から出てきた言葉で、自然が発するメッセージを分かりやすく参加者に伝え、自然と参加者との出会いを仲介するなかで、喜びや感動を分かち合う解説活動を行う人のことである。従来のガイドは観光者がある所まで導き、ともすれば知識や情報を一方的に伝えるだけで終わった。インタープリターには、参加者が見たり体験したりする事象がどのような背景のもとで生起しているのか、それを巧みな話術で語り、参加者の興味を刺激し啓発するエンターテインメント性が要求される。

都市景観も自然と同様、様々な構成要素が複雑に絡み合いながら維持されている。その要素の一つだけを語っても、都市景観や自然の醍醐味には近づけない。大阪市内を歩くとよくわかるが、様々な時代に刻み込まれた痕跡が現代の地表に共時的に存在している。江戸時代の大阪だけを探して歩くと、不完全で中途半端な残骸に過ぎない。しかしながら、大阪の魅力を色々な時代の痕跡が共時的に存在するところにあると捉え、それを巧みに語るならば、大阪のゴチャゴチャとした多様性は大いなる魅力へと昇華される。

都市景観のインタープリターは、すでに大阪で育ちつつある。例えば、一本松海運株式会社が運営する「なにわ探検クルーズ」は、落語家が巧みな語りで約90分の船旅を楽しませてくれる。道頓堀スタジオジャパンが繰り広げる大阪体験ツアーの数々も、インタープリターの巧みな語り商品価値を増している。

Tourism が「観光」と訳されるため、観光では「光り輝くものを観る」と思われがちである。しかしながら、Tourism の本質は、異文化理解であり異地域理解である。光り輝くものの背後には必ず影ができるが、インタープリターが介在すれば、影の部分も Tourism の対象となりえる。西成区の日雇労働者の街・釜ヶ崎で、「釜ヶ崎のまちスタディ・ツアー」が不定期に行われている。このツアーで釜ヶ崎という地域の成り立ちや現状を語る「おっちゃんガイド」たちも、立派なインタープリターである。

大阪のあちらこちらで、都市景観のインタープリターが育つことが、大阪の魅力の発見と発信に直結する。都市景観のインタープリテーションがもっと事業化されれば、着地型観光が大阪の地に根付くに違いない。大学で講義する私も、一方的に知識を教授するだけのガイドではなく、社会の現実を伝えるなかで学生の知性や探究心を刺激するインタープリターでありたい。

(阪南大学国際観光学科教授)

千里地理通信 第59号

2008年9月20日 発行

関西大学地理学研究会

〒564-8680 吹田市山手町3丁目3-35

関西大学文学部地理学教室内

Tel: 06-6368-1121 (内線 4890: 大学院生室)

e-mail: moto@ipcku.kansai-u.ac.jp

URL: [http://www2.ipcku.kansai-u.ac.jp/~moto/KU\\_Geography/](http://www2.ipcku.kansai-u.ac.jp/~moto/KU_Geography/)

郵便振替: 大阪 00970-4-81149